師匠と一夜

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談２

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18930633

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 夢男主, 夢男主×霊幻, 男性妊娠

リクエストいただきました、みーくんルートの後日談の２話目です。夢男主です。（https://pictbland.net/items/detail/1948394）←にて名前を変換して夢小説として非会員でも読めます。ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談にあたります。師匠の子供がしゃべります。なおモブくん、エクボ、芹沢の倫理観が少しアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談２

自給自足の田畑が見える、のどかな村。
その入り口に俺と子供達、みーくんと霊能力者達が呆然と座り込んでいた。
「ここが、隠れ里……」
ざり、と草履で砂利を鳴らしながら。
真っ赤な着物を着た双子のおかっぱの女の子が、手を繋いで俺たちの前に立つ。
「「おかえり、私たちと同じ者たち」」
双子はみーくんたちや子供達を見て微笑む。
「「いらっしゃい、よそ者」」
そして俺には冷たく言い放った。
「「ここは能力を持つ者の村。ただのヒトは歓迎できない。分かって」」
「分かった。歓迎は不要だ」
迫害されないだけマシだろう。キョロキョロと俺は自分の靴を探す。
「「私たちは守り人」」
「私は右」
「私は左」
双子が呼び名を伝えてくる。すまん、正直見分けがつかん。
「あなたは怯えない」
「あなたはやりやすい」
「怪異には慣れてるからなぁ」
「「その呼び名は嫌い」」
おっと。早速地雷を踏んじまったか。
「私たちは異なれど怪しくはない」
「『持ち過ぎた者』そう呼んで欲しい」
「了解」
子供達やみーくん、霊能力者達も靴を探し出して履いている。
「「村を案内して、ハァダ様にご挨拶してもらう」」

「ハァダ様？」
「「村の守り神様」」
ハァダ……ハァダ？何かが訛ってるのか？
「どんな漢字を書くんだ？」
「私たちは知らない」
「お堂には書かれてるかも」
「しっ、右！よそ者には余計なことは言わないで」
ふむ。唇を触りながら考え込む。
「駆け込み寺になってるのはそのハァダ様に関係あるのか？」
「……ここは『持ち過ぎた者』が迫害から逃げて作られた村」
「人ならざる者に不本意に子供を孕まされて逃げ込んだ者も多い」
「「あなたのように」」
「強力な人ならざる者から私たちを守るためにハァダ様は『村の決まり』を作った」
「ひとつ、『持ち過ぎた者』が村民となれる」
「ひとつ、『持ち過ぎた者』の親は村に入れる。ただし」
「ひとつ、駆け込んだ、離縁したものの片割れは入れない」
「範囲を限定した、当時生き神となったハァダ様がかけた強力な呪いだから。このルールは何人たりとも破れないよ」
みーくんがにっと笑いながら言う。
「「そうでもない」」
双子が空を見上げると、青空に真っ黒なヒビがビシィっと入った。
「強力な『持ち過ぎた者』が村の境界を攻撃してる。ハァダ様に助けてもらわないと、侵入される」
「村人を集める。ハァダ様のお堂に」
双子は早足で村の山の方に向かって行き、お堂の隣にある警鐘をガンガンと鳴らした。
「「みんな、ハァダ様に祈って」」
村から６人ほどの大人と、２０人ほどの子供達が集まってくる。
子供達は一目で『持ち過ぎた者』なのだと分かる容姿をしていた。
ある者は目が３っつあり。
ある者はウロコと赤い目を持ち。
なるほどな、と納得する。ここだと茂隆も永崇も浮かないな、と

ちょっとホッとする。
対して大人がみんな暗い顔をしているのは気にかかったが、
「「「ハァダ様、ハァダ様、」」」
お祈りが始まったので、とりあえず俺も手を合わせて目をつむる。
【ヤクニタテ、ヤクニタテ、ムラノタメニ、タテトナレ、サムナクバ、シタヲヌキ、ハラワタクラウ】
ぶわあぁ、と子供達からお堂に向かってなんらかの力が注がれ、村のバリアが修復されていく……のはいいが、お祈りの呪文なんか怖く無いか！？
「「半月と蜂蜜も、一緒に」」
どうやら茂隆と永崇のことらしい。
茂隆の半月形の目と、永崇の俺と同じ蜂蜜色の髪から取ったのだろう。
「「え〜っと、ハァダ様、ハァダ様、役に立て、役に立て、村のために、盾となれ、さもなくば、舌を抜き、ハラワタ喰らう……」」
ぶわ、と２人から大きな力の塊がお堂に流れ込み、一気に空のひび割れが塞がったが、２人は微妙な顔をしていた。
いややっぱりお祈り怖いって。
ここの神様って……いや土着信仰に無闇に触れるのはやめよう、死亡フラグだ……。
「「諦めたようです」」
双子が空を見て、お堂を見て頷く。
「よそ者、」
「霊幻だ」
双子は目を見開く。
「名前をやすやすと教えないでください、イタズラな子供に呪われます。そうですね、あなたはこの村の教師になるので、『センセイ』と名乗るといいでしょう」
「……分かった」
「センセイ、あなたを追ってきたアレはなんですか」
「結界にヒビが入ったのは６１７年ぶり、将門塚のタタリのとばっちり以来だ、とハァダ様はおっしゃっています」
「……俺の可愛い弟子と、腐れ縁の悪霊と、俺の可愛い部下だ」

「「はぁ！？」」
「俺に呪いをかけて、ちょーっとばかし人の道から外れてしまったが、みんないい奴だよ」
「……いいなぁ」
「これ、右。なるほど、あなたが祈り続けているから、信じ続けているからこそ、彼らはかろうじてヒトでいられているのですね。助かりました。神やただの怪異と化されていては、村が危なかった」
「おい、怪異って」
「私たちはヒトです。ただ『持ち過ぎ』てしまっただけ。怪異では無い。でもアレらは違う。アレらは……もうほとんど、ヒトとしてのルールから外れてしまっている」
双子は悲しそうに俺の全身を見る。
「愛を呪いに変えてしまった。魂を自らの望みに触らせてしまった。一度呪いに変えてしまった愛はもはや愛には戻らない。一度ヒトでなくなればヒトには戻れないように。可哀想に」
俺は考え込む。
「それって、俺のせいなのか？」
「そうではないけれど、そう考えてしまうのはあなたのせいでしょうね」
いつかのエクボみたいに言われて。
無性に懐かしくなって、それが悲しさを呼んだ。
「「さて、今度こそ村を案内します。丁度いいので村民を紹介します。龍の子、祟り神の子、稲荷の子、蛇神の子、犬神の子、」」
この子達は見た目で分かる。呼ばれるたびにペコリと頭を下げていた。
「「石神の子、神木の子。彼らは父親が神々です。力が強い。半月も現人神の子ですね。潜在能力がかなり強い。怒らせるのは得策ではないでしょう。」」
茂隆は複雑な顔をする。モブは超能力者だと思うんだが……。
「「ここからは霊の子です。こういう言い方は私たちもしたく無いのですが、どういった事情があれ生きた人を孕ませた時点で残念ながら悪霊と定義されます。みな悪霊の子です。三つ目、鉤爪、黒霧、赤目、鬼火。蜂蜜もそうですね？しかし、蜂蜜はなんとも美し

い人の外見を持っている。羨ましいことです。蜂蜜ならば、成人すれば普通の人として暮らしていくこともできるかもしれません」」
永崇のことを蜂蜜と呼びながら、うっとりと守り人の双子が言う。
永崇は外見は俺そっくりだが、目元だけは意地の悪そうな切長の目になってきた。誰かさんが憑依した時そっくりだ。
「「そして、『持ち過ぎた者』の子で、『持ち過ぎた者』として産まれてしまった者たちです。主に超能力者や霊能力者の子ですが、普通の人の両親から産まれることもあります。どちらにせよ、迫害されることがほとんどで、こういった隠れ里にいることが多い。黒髪の１４歳くん、黒髪の１２歳ちゃん、黒髪の１０歳くん、茶髪の７歳くん、黒髪の５歳くん、黒髪の５歳ちゃんです。センセイのお腹の子も『持ち過ぎた者』ですね。……超能力者ですが、力の質が聖なるものです。どうやら苦難の道を定められた子のようです。祈りを込めて、私たちはその子をアジャリと呼びましょう」」
苦難の道か……。実の父がはっきりとしない、針の筵だった生活を思い出す。
「だってよ。良かったな、アジャリ」
「「くれぐれも真名としないように。ちゃんと名付けるのですよ、センセイ」」
苦笑する。
この子は芹沢が名付けると言っていた。
俺はどうにもそれが気にかかって、自分でこの子の名前を考える気がしなかった。
いつまでもそれではいけないのは、分かってはいるんだがな……。
父親からの最後の贈り物。それを受け取る権利を、この子から奪ってもいいのだろうか。
「「村を案内する。ついてきて」」
双子がそう言うと、村の子供達はそれぞれ散っていく。大人たちは紹介もされなかった。「よそ者」だからだろうか。うーむ、あとで個別に挨拶しておくか……。
「「あそこが子供達の家。大人が交代で食事を作りにくる。あのあたりは空き家。よそ者が住んでいる。センセイも好きなのを使えばいい。半月と蜂蜜はセンセイと住んでもいいし、子供達の家に住ん

でもいい」」
「え、当然お母さんと住むけど……」
戸惑ったように茂隆が言い、永崇がコクコクと頷く。
「「そう……羨ましい。妬まれないように気を付けて」」
そうか、この村は大人の数に比べて子供の数が圧倒的に多い。親から捨てられた子が多い、と考えた方がいいか……。
「「あれが学校。先生がいなかったから、ずっと休校してた」」
「おい、俺は先生をやるなんて言ってないぞ」
にこおっと双子が笑う。
「「きっとあなたはやると言い出す。あれが田んぼ、あれが畑。どちらもタネを撒けば、勝手に育つ。あれが乳牛、そして雌鶏。これも勝手に生きてる。世話は要らない。この村では殺生は禁じられている。蛋白質は牛乳と無精卵で取って」」
すごいな、神様の加護。というか、これ、やることほとんど無いんじゃ……？
「大人は昼間、何してるんだ？」
「「……生きてる」」
凄い答えが返ってきた。
「「あれが図書館、あれがプール。使われてるの見たことないけど。村のあちこちに井戸があるから、汚さないように使って。そして、あれが病院。あなたが出産する場所で、病気を治す場所」」
どきりとする。あまり子供にセックス依存症のことは話したくない。
「「医者を紹介する。ついてきて」」
二階建ての病院は、これだけが新しい鉄筋コンクリートの建物で、和風のこの村からは浮いていた。
入り口のインターホンを押すと、しゃがれた声で「はい」と初老の男性の声がする。「開いてるよ、どうぞ」と続いたので、ドアを開けて、
「うわ」
と思わず声を上げてしまった。壁や天井にびっしりと大きな蜘蛛の巣が張られている。病院なのに衛生的に大丈夫なのか？これは……。

幸い床は綺麗に掃き清められていたので、廊下を進んで光が漏れている診察室に入る。
「……やあ。私の姿を見て悲鳴を上げなかったヒトは久しぶりだよ」
いや。
びっくりして硬直しただけ。
「「薬師瑠璃光医師です。見ての通り、大蜘蛛神様の化身です」」
その白髪の老人は４対、８個の目を持ち。
足があるべきところからも腕が生え、これまた４対、８本の腕を持っていた。
「こんにちは、霊幻あら──」
「「センセイ！！」」
「……先生です」
特注の白衣を着た薬師医師にぺこりととりあえず頭を下げる。
「妊夫を診るのは久しぶりだねぇ。腕が鳴るよ。せっかくだから最新のエコーやレーザーメスをAmazonで買おうかな」
「薬師先生！？また日輪に請求書を送り付けるつもりですか！？！？」
みーくんが叫ぶ。
「お前たちが持ち込んだ聖母だろう。責任は取ってもらおう。どおれ……ふむふむ、心音もしっかりしてる。逆子でもない……お急ぎ便で明日にはエコーが届くから、明日またちゃんと診よう。破水したり出血したら夜中でもここに来るんだよ？」
「薬師瑠璃光先生！？」
「もうポチっちゃったから」
カラカラと笑う薬師医師に、肩を落とすみーくん。つられてくすりと笑うと、薬師医師が８つの目で覗き込んできた。
「お前さんは異形を恐れないねぇ。不思議なヒトだ」
「いやだって、普通に話せてるし……」
「ふぅん？そんなので今までよく死ななかったねぇ？お前さんに力は何もないが、ヒトとしては警戒心の薄過ぎる個体だよ。私たちから見て、あまりに目立つ。山に生まれてしまった白ギツネのようだ。だから異形に目をつけられてしまったのかな……お前さんは、

この村にいる方が平和に暮らせるかもしれないね。これまで怪異に襲われて大変だったろう？」
「まぁ……除霊の仕事してたからな」
「「「無能力者なのに！？」」」
双子と薬師医師が驚いて叫ぶ。
「こ、こんなに驚いたのは５００年ぶりだよ……」
「いやまあ、センセイさんは上級悪霊を筆頭に、最強に近い超能力者を従えていたから……」
みーくんが苦笑しながら説明する。
「なるほど……惹き寄せた怪異がお主を守ってたか……それにしても無茶する男だねぇ……」
「そこまで言わなくても……」
「ともかく、ワタシが診る以上は大蜘蛛様の名にかけて安産させてやる。なにせ８つの目で視て、８つの腕で施術するんだからね。この世でワタシ以上の名医はいないよ」
「よろしく頼む」
「それと、『あっち』の方の治療もな。ワタシに任せておきなさい」
こそっと言われて顔が赤くなる。
「まかせた」
こそっと耳打ちし返した。
「支払いはクレジットかPayPayで頼む。どうしてもというなら口座振り込みでもいいが、保険点数の計算がめんどくさくなるからねぇ」
「対応してんの！？」
「この村をなんだと思ってる？現代日本だよ、一応。あ、今日、月初めだから、保険証出してね」
「……建物や着物が江戸時代だから、生活全てがそうなのかと……」
「ハァダ様のいいつけでそうなってるけど、医療はそうはいかないんだよねぇ。最新の論文を読むためにもネットも必要だし」
「薬師先生は医神の化身だから、ハァダ様も甘いんだよ」
みーくんが追加説明してくれる。

「ハァダ様は話のわかる方だよ」
ふふ、と薬師先生は笑う。

「村のモノには、ね」

その笑い方には、ゾクリとした。

続